



へき地医療がかかえている問題には、医師や看護師などのスタッフの不足や、医療・入院施設の不備、中核・支援病院や最新医療情報からの疎遠などいろいろな側面があり、それぞれの問題点がお互いにマイナスに働きあつて、へき地医療を改善するための努力や試みの障害となつていといわれています。また、昨今の医師不足は大病院でも深刻で、これまで行つてきた診療所への医師派遣が困難な課題として浮き彫りになってい

「地域医療の厳しい現状」

Chapter 01

庄原市の医療の現状

「住民を支える診療所のいま」

庄原市の人口は10月末日現在、4万712人。1市6町が合併した5年前と比べて約3千人減り、65歳以上の高齢者が37.4%、旧庄原市以外の地域は、ほぼ40%を超えています。県の指標と比較してみると、高齢化が大きく進んでいることがわかります。

市内には、入院治療を必要とする重症救急患者を受け入れている病院（二次救急医療機関）として、庄原赤十字病院、西城市民病院の2つの病院があり、中核的な役割を担っています。しかし、この2つの病院までが遠く、時間がかかる場所にお住まいの方、特に高齢の方は、受診に行こうとするだけで負担になってしまいます。それだけに、それぞれの地域にある身近な診療所は、入院を必要としない初期救急の役割を担う「かかりつけ医」として、わたしたちになくてはならないものとなっています。

庄原市内の病院および診療所などの医療施設マップ

地域別の医療施設の数と医師数

高野地域	
人口	65歳以上の人口
2,143	872
高齢化率	医療施設数 医師数
40.7%	3 3

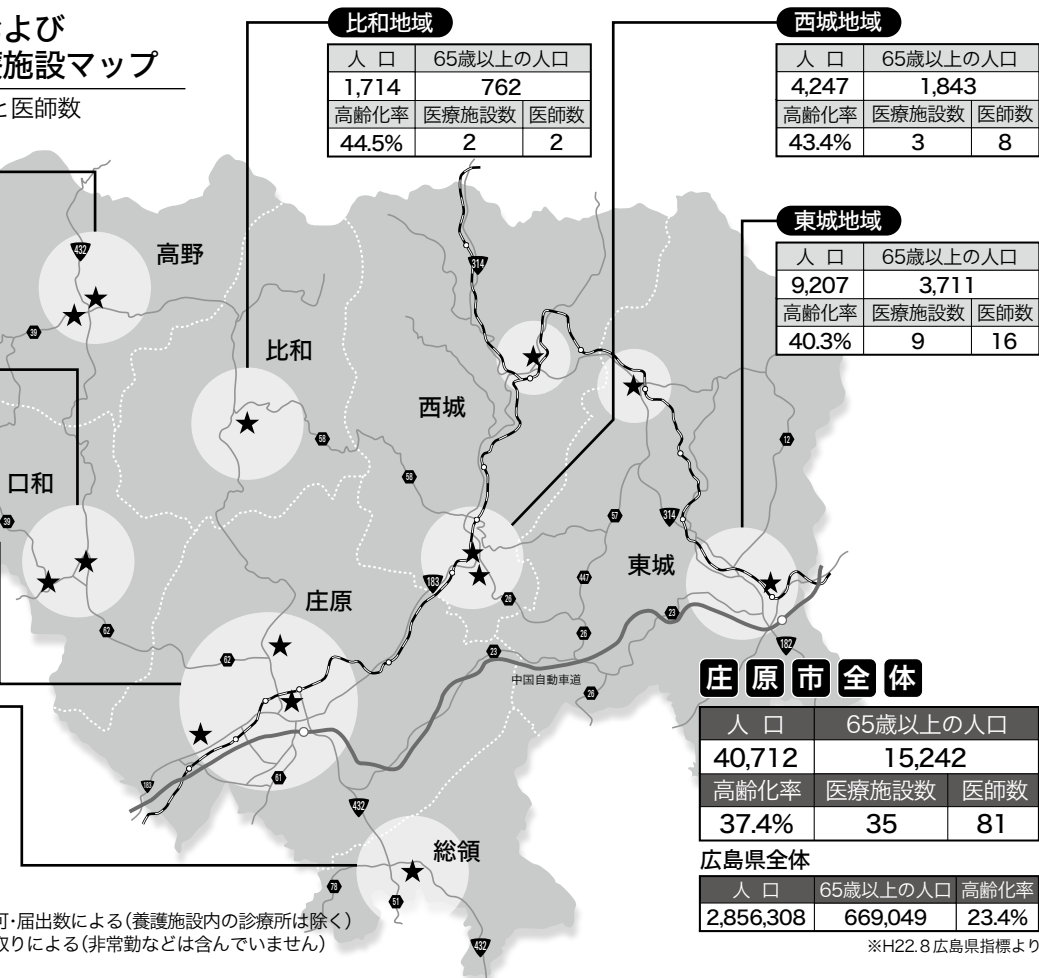
口和地域	
人口	65歳以上の人口
2,344	942
高齢化率	医療施設数 医師数
40.2%	2 2

庄原地域	
人口	65歳以上の人口
19,417	6,466
高齢化率	医療施設数 医師数
33.3%	15 49

総領地域	
人口	65歳以上の人口
1,640	646
高齢化率	医療施設数 医師数
39.4%	1 1

★…診療所などの医療施設

※医療施設数は、広島県への開設許可・届出数による（養護施設内の診療所は除く）
※医師数は、医療施設などへの聞き取りによる（非常勤などは含んでいません）



市内には、庄原赤十字病院や西城市民病院といった大きな病院があります。一方、中心地から周囲に目を向けると、小さいながらも頑張っている診療所があります。

最近では、テレビドラマや情報番組などでも、へき地・へき地医療という言葉をよく耳にするようになりました。この、「へき地」や「へき地医療」とは何でしょうか。

全国的に医師不足が深刻となる中、中山間地はさらに医療の危機に直面しています。いま近くにある診療所がなくなってしまうのか。なくなってしまうとどうなるのか。



診療所と地域医療

「へき地医療を考える」

①「へき地」とは
「都会までが遠く、へんぴなところ、山間部や離島など、交通や通信の不便な地域。自然的、経済的、社会的条件に恵まれない山間地、離島その他の地域のうち、医療の確保が困難である地域をいう。また、※無医地区、無医地区に準じる地区、へき地診療所が開設されている地区などが含まれる」といわれています。

②「へき地医療」とは
へき地で行われる医療のことです。主に「へき地診療所」や「小さな病院」が行っています。庄原市では、各地域にある診療所がそれにあたります。そして、診療所と大きな病院との連携や、医師がいない時には、代わりの医師の派遣や専門医による巡回診療など、これらを含めたものをまとめて「へき地医療」と呼んでいます。

※病院：20床以上の入院施設が整った医療機関
※診療所：入院施設は有しているが、19床以下の場合や、まったく入院施設のない医療機関

※無医地区：医療機関のない地域で、その地区の中心的な場所を起点として、おおむね半径4kmの区域内に人口50人以上が居住している地区であつて、かつ容易に医療機関を利用することができない地区。



週一回、在宅患者を訪問

「ご家族の献身的な看護が見てとれること、ありがたう」という言葉を言っていただけのこと、そういった思いをもっていたらいい部分です。そして「本当に地域の皆さんに支えていただいている」と繰り返す永井医師に、地域の方々との心のつながりを強く感じます。そういう永井医師も、つらいと思うことがあると言います。それは、一人の診療では完璧にならない部分があり、患者に迷惑をかけているのではないかと、医師として患者の期待に応えられていないのではないかとということ。「そこを少しずつ改善して、よりよい方向に進んでいければと思っています」。地域の医療に対する思いの強さが言葉に表れます。

「地域の皆さんの支えがあるか

●永井先生にいつも感謝

いつも診療所を利用しています。忙しいときでも丁寧に見てくださり、朝早くから夜遅くまで診察してくださいます。若いのにとても腰が低く親身になってくれ、信頼できる本当に良い先生。この先生がいるから診療所に通うという患者さんが多い。わたしもその一人です。いま地域で元気に活動できているのも先生のおかげです。



奥 カズエさん
(総領町稲草)



やさしく声を掛けながら診療

「ここ、ここで頑張れる」。着任して4年。自身が目指す、診療所だけの医療から地域の人たちと一緒にやっていく医療に、近づいてきたと実感しています。

「こんにちは。〇〇さん調子はどうですか？」。往診先のお宅で、笑顔でやさしく語りかける総領診療所の永井道明医師。毎週木曜日の午後は、総領町内で診療所に足を運ばない患者の自宅まで往診に出向きます。

「だいぶよくなっていますよ」という永井医師の一言に、見守る家族の表情が和らぎます。往診する患者の多くは、自宅から外出することが難しい状態にあるため、付き添う家族も「先生の往診は本当にありがたい」と話します。そんな永井医師ですが、往診に行く前には、前よりも健康状態が悪くなっているかといつも心配になります。しかし、診察してみても健康状態が良くなっていると、そのご家族の方が親身になって見てくれるのだと思えば、感謝の念がこみ上げてくるそうです。

◎ 国民健康保険 総領診療所

現場から
その1



市役所総領支所裏にある国民健康保険総領診療所は、旧総領町が設置し、合併以降も公設の診療所として、総領地域の医療を支えています。医師1人、看護師2人、臨時看護師1人(半日)体制。

なが い みち あき 永井 道明 所長

自治医科大学医学部卒業後、県立広島病院総合診療科に2年勤務。平成17年から庄原赤十字病院内科に2年間勤務し、平成19年から現職。安芸高田市出身、33歳。

Chapter

診療所という現場を知る

地域の医療ステーションとして不可欠な診療所。診察やけがの治療などのほか、住民の拠り所としての役割も担う診療所は、地域住民から寄せられる期待も大きいものがあります。各地域にある2つの診療所をレポートします。



下高保育所での健診の様子

「できる限り、ずっとここで診療を続けよう」。高野診療所の山崎力医師は、力を込めてこう続けます。「自分のふるさとですからね」。地元出身の医師として、高野診療所で勤務することを決意したのは6年前。広島大学大学院で4年の研究期間を終えるころ、当時の高野町長と助役の2人から地元での診療を勧められたのがきっかけでした。「お話をいただいたときに、立っていました。とはいえ、診療所での診療だけでは対応できない病気が多いことも事実。」「専門的な治療や入院治療が必要な病気以外ではできるだけ診療所で対応したいと思っています。そのために、ここで治療を続けていくのかどうかの判断が必要です」。山崎医師は、超音波検査や胃内視鏡検査などができる医療機器を市が整備したこと、その判断ができるようになり、必要と判断した場合には、総合病院の専門科などと連携し診療を進めています。現在、多くの患者を診療し、とてもやりがいを感じているという山崎医師は、「ここでは、単純に病気を診るだけではなく、患者さんが一人暮らしなのか、支えてくれる家族がいるのか、交通手段があるのか

●よく利用しています

インフルエンザの予防接種にやってきた年盛さん、土居さん、林さん。「町内に診療所がありとても安心」先生も話しやすく、会話にも乗ってくれてとてもいい先生」と話す。



更新された最新の医療機器

かなど、そういう部分まで考えてあげる必要がある」と話し、地域医療の実情に目を向けます。「何でも相談できる地域に必要とされる医師でありたい」。生まれ育った高野の医療を支え続けます。

◎ 高野診療所

現場から
その2



高野福祉保健センター内にある高野診療所は、旧高野町が設置し、合併以降も公設の診療所として、高野地域の医療を支えています。医師1人、看護師3人体制。

やま さき ちから 山崎 力 所長

広島大学医学部を卒業後、同大学の外科に入局。大学での1年間の研修を経て、県立広島病院小児外科に2年間、本郷中央病院一般消化器外科に2年間、安佐市民病院心臓血管外科に3年間勤務。平成12年から広島大学大学院で4年間、遺伝子関連の研究に携わる。平成16年から現職。高野町出身、41歳。

「できる限り、ずっとここで診療を続けよう」。高野診療所の山崎力医師は、力を込めてこう続けます。「自分のふるさとですからね」。地元出身の医師として、高野診療所で勤務することを決意したのは6年前。広島大学大学院で4年の研究期間を終えるころ、当時の高野町長と助役の2人から地元での診療を勧められたのがきっかけでした。「お話をいただいたときに

は、地元に戻るべきか悩みました」。卒業後入局している外科の派遣先の関連病院で勤務を続けるか、地元で地域診療をするのか自問自答し悩みぬいた結果、「この機会を逃せば今後高野に帰れることはないかもしれない」と思い、気持ちを固めました。「二つの専門分野だけの経験であれば、難しかったかもしれませんが」と山崎医師。違う分野の外科を経



西城地域に限りませんが、高齢化率の高さから有病率も高く、通院する人や医療ニーズが増えている中、今の体制を維持していくには、病院や行政だけでなく、もっと広い視点で考える必要

しかし、西城市民病院の医師は現在6人。病院の機能を維持していくには、ギリギリの体制です。医者の数や医療スタッフが少ない中で、住民の皆さんに今までと同じような医療提供は難しくなっています。

西城町には開業医が現在2人いらっしゃいますが、高齢で後継者もいないため、いつまで存続するかは不透明です。このことから、西城地域の医療に対する西城市民病院が果たす役割は大きいと言えます。

この場合、経営が成り立たなければ、病院になる危険性があります。でも診る」という医師が多かったら夜中

どのような視点が必要か

Chapter 03 へき地医療を守るには

へき地医療を守っていくために必要なこととは。市内で医療を支えている医師お二人に、地域医療に対する思いを伺いました。



地域医療を共に考える

地域医療の現状は、全国的に医療の都市部への集約化、医師研修

師が減少し、医療崩壊へと進んでい

ます。庄原市では、病院の医師の減少、診療所の継承や医師の高齢化、看護師不足などが問題となっています。

この現状を打破するため、昨年、庄原赤十字病院と診療所の連携の強化と、皆さんに利用しやすい医療体制を構築することを目的に、庄原市、庄原赤十字病院、庄原市医師会の3者で「庄原市の地域医療を考える会」を立ち上げました。この会の運動と広島大学・広島県が取り組みを進めていくことで、情勢が少しずつ改善に向かっています。これに関連して市は、医師や看護師を目指す人への奨学金制度を設

Interview about the medical care



庄原市医師会
と 戸谷 完二 会長



西城市民病院
郷力 和明 院長

要があると思います。これまでできていた診療ができなくなり、住民の皆さんにしわ寄せが行ってしまうことになりかねません。

連携が不可欠

山間地域の診療所として必要

なサービスは、医療、介護、保健福祉といった分野の連携をいかにとるかということです。西城市民病院も診療所と同様に、訪問診療や健診、デイサービスなどを行っており、入院し退院された後も、各分野と連携し支援体制をとっています。西城町は無医地区が多いですが、西城市民病院があることで、住民の安心につながっています。7月に災害が起きた大戸地区もそうですが、こういった医療体制をとっている西城市民病

けたり、「考える会」では、看護師不足と地域医療の展望について考えるシンポジウムを開催したりするなど、地域医療に対する取り組みを進めています。

話が変わりますが、地産地消という言葉があります。それは医療の分野でも言えるのではないのでしょうか。地域の皆さん、行政、医療者が一緒になってみんなで地域社会、医療を守り育てていくことが必要です。それには、3者が「お互いさま」の気持ちを持つことが必要不可欠です。

変わり行く診療

病

院は、入院患者と専門外来を診る、診療所は、外来患者を診る、というような診療体制が、今後わが国の主流になると思われれます。一次医療

(外来で治療できる病気に対する医療)と二次医療(より専門的で、入院を必要とする病気に対する医療)を区分けすることで、病院の医師は二次医療をしっかりと診ることができ、一次医療からの負担を軽減することができそうです。

また、超高齢者社会を迎え、これから生活介護」と長期療養の関係がもっと密接なものとなってきます。国は、在宅療養を優先し、家での暮らしへ誘導していくと思われれます。入院期間は短くなり、在宅での療養・生活が主となりま

す。そして、在宅での療養は、医師・訪問看護師・リハビリ専門士の訪問で支えていくことになると思われれます。

市民の皆さんへ

日

本人の平均寿命は世界一ですが、自分の人生の最期が他人任せになっていく現状があります。誰にでも起こり得る「認知症、寝たきり」になる前に、自分で決めるように「自分の願い、思いを書き留める」ようにしましょう。そして、自分らしい人生を送り、長生きして良かったと言えるような住み慣れた地域が実現できるようぜひ考えてください。





Chapter 04 住民として できることは何か

ふと気付いたときに診療所がなくなってしまった、となっては後悔しても遅すぎます。地域医療を守り続けるために、わたしたち市民も一緒になって考え、行動できることがあるとすれば、どんなことでしょうか。



◎岩瀧武雄さん(口和町)

医師としっかり接すること
その地域の人が診療所でしっかり診てもらうことが何より必要だと思います。また、診察してもらうだけでなく、先生とコミュニケーションを交わすことが、とても大切だと思います。医師と患者という関係だけではなく、お互いに心が通えば、地域にも愛着をもつていただけ、ここで続けようと思っただけのきっかけになると思います。



◎久保田昭美さん(東城町)

予約受診を心掛ける
遠くの大きい病院よりも、近くの診療所で診てもらおうようにしています。また、どうしても大きい病院で受診する場合は、診療所から予約してもらって受診すればどうでしょうか。大きい病院では患者さんが多く、すぐには診てもらえないことがよくあります。予約することで、時間に合わせて診ていただけます。医師の負担も減ると思います。



◎池上徳明さん(川手町)

医療情報を集めること
病気や症状を勉強しておくということが必要ではないでしょうか。病気の特徴などを知っておけば病院へいくかどうかの判断材料になります。今は、インターネットを利用すれば医療情報が簡単に入手できるので便利です。また、家庭でできる昔ながらの治療法を見直してもいいかも知れません。病院に行かなくても済むほうがいいですよ。

Chapter 05 課題に立ち向かう

診療所を含め地域医療が抱える課題を克服するために、市はどう取り組んでいくのか。その考えや今後の取り組みを西田英司保健医療課長に聞きました。



保健医療課
西田英司 課長

連携を強固に

「医療崩壊の危機」と言われるように、今日の医療情勢は大変厳しい状況です。病院や診療所が必要とする、医師・看護師を確保することができる仕組みづくりは、国の責務であり差し迫った重要な課題です。
ようやく国は、医学部の定員枠を広げるなどの医師を増やす方向に政策転換を図っていますが、効果が現れるまでにはしばらく時間がかかります。現在、市民の皆さんの健康と安心を支える診療体制は、入院を必要とする重症患者の受け入れ態勢を整えている庄原赤十字病院と西城市民病院、各

地域にある診療所によって確保されています。
そして、診療所と病院の間では、病気や症状によって専門性を必要とする場合には診療所から病院へ、診療所に対応できる病気や症状の場合は病院から診療所へと、役割を分担する医療連携が図られてきています。
市は、公的な市内の病院や診療所に最新の医療機器を整備するなど、医師が働きやすい環境を整えるための取り組みを積極的に進めています。また、病院と診療所の連携がより充実するように、病院と診療所を光ファイバーでつなぎ、情報通信網を活用した「地域医療連携ネットワークシステム」の整備を進めており、平成23年4月の運用開始を目指しています。

努力を積み重ねる

市全体の地域医療を将来にわたって守っていくためには、「庄原市の地域医療を考える会」の取り組みを充実させ、目の前の課題を一つ一つ解決するための努力を積み重ねていくこと、そして、行政や医師会など医療関係者の努力だけでなく、地域診療に懸命にあたっていたらいてる医師や看護師などの医療スタッフを、市民一人ひとりが守っていくという努力も不可欠です。医療スタッフに感謝の気持ちを伝えることで信頼関係を築くことができるとともに、医療スタッフが働きやすい地域、働いてみたいと思えるような地域になると考えています。

POINT



1 重度でない場合はまず診療所へ

大きな総合病院では、診察してもらおうまでに長い時間がかかってしまうことがよくありますので、まず診療所で受診することをすすめます。診療所の利点として、軽い症状であれば、診療所は総合的に診ることができます。また、症状が重い場合は、専門医にきちんと紹介してもらえます。患者さんの状態をあらかじめ知らせ、検査などの予定も組んで診ていただくことが可能です。

2 かかりつけ医をもつ

複数の病院や診療所を受診することは避け、かかりつけ医をもちましょう。普段から診察していることで、身体機能やこれまでにかかった病気など患者ご本人の情報を蓄積することができ、身体の異常に気が付きやすくなります。

取材を終えて

「医者には来てほしいが、大都市でも足りない。ましてや、こんな田舎に来てくれるわけがない」といった声を耳にすることがありました。確かに、多くの面で都会には魅力が多いと思いますし、医師が望む環境がより整っているかもしれません。しかし、物理的なものだけでなく、「患者のマナーがいい」「地域の人から大切にされる」といった面が、医師にとっても大きな魅力なのだと思います。診療所は、まさにこのことがあから明瞭で続いている。と力を込めて話されていたのがとても印象的でした。
現在、庄原市の地域医療を考える会や庄原の小児医療を考える会、さらには、市民一人一人が考えることが必要です。絶対に診療所をなくしてはいけません。